

論文

ガブリエル・タルドの『経済心理学』における労働概念について

中 倉 智 徳*

はじめに

本論は、ガブリエル・タルド (Gabriel Tarde 1843-1904) の「経済心理学 Psychologie économique」における労働概念を中心に分析し、労働を精神的なものから考察することの現代的意義を指摘するものである。タルドは、個人人間あるいは個人 - 集団間でやりとりされる意思や知識、信念や欲望といった精神と精神の間の作用をその考察対象の中心においた。タルドは自らの立場を、当初は社会学と呼んでいたが晩年にさしかかった1900年頃から、精神間の作用に注目するという点を強調して、「間 - 精神心理学 psychologie inter-mentale」あるいはより簡単に「間 - 心理学 inter-psychologie」と呼ぶようになった¹。この「間 - 心理学」を経済的な現象に適用したものが、本論で主に検討される『経済心理学』である。『経済心理学』はタルドの死の二年前に公刊された彼の最後の著作であり、コレージュ・ド・フランスでの1901年から1902年にかけて行われた講義にもとづいて書かれたものであるが、それは同時に、初期の論文から既に断片的に述べられてきた主張の集大成でもある²。

タルドの『経済心理学』の基礎となっている間心理学をみておこう³。「社会生活を産業、労働、生産者といった相の下で検討するためには、同様に、犯罪、不道徳、破壊的なものといった側面から検討するためには、何よりも先ずその基礎的關係を研究する間 - 心理学を立ち上げてやることだと思われた」(PE I: i) と序論で述べられているように、『経済心理学』において間心理学は、社会生活を分析するための一般理論として位置づけられている⁴。タルドは間心理学から出発することで、他の社会科学にも適用可能な「価値の一般理論」の構築を目指した⁵。タルドは、価値を「真理価値」、「美的価値」、「効用価値」という三つに分類し、効用価値以外のものへと拡張しようと試みた。この「価値の一般理論」は、「知識の理論」、「権力の理論」、「権利と義務の理論」、「美の理論」、そして「富の理論」を統一して扱える科学の基礎をなすものとして構想されていた (PE I: 97)。価値を間心理学的に考察するということは、価値を、物あるいは行為そのものに客観的にあるものだとみなすのではなく、主観的なものとみなすことを意味する。価値が客観的なものではありえないという批判は、タルドが「古典派経済学」や「社会主義的な経済学」の双方に対して行った主要な批判の一つである。さらにタルドにとって価値とは一人の個人における快 - 苦において快樂計算にもとづく効用のことではない。むしろ、価値は、個人と個人の間でやりとりされる欲望および信念によって決定される⁶。こうして間心理学的な現象としての価値の分析から開始するなら、「古典派経済学」及び「社会主義的な経済学」の双方いずれの経済学に基づいて述べられてきたことは、「いまや完全に改変されなければならない」(PE I: 97) のである。

またタルドによれば、現象は、反復 répétition、対立 opposition、適合 adaptation という三つの様態において分析されなければならない。反復とは、一つの要素の正確な再生産であり、認識の基礎をなすものである。対立とは、二つの要素が、衝突したり、リズムのように継起的に現れてきたりすることである。適合は、異なる要素同士が「幸福な干渉」(LI: 86=57) を引き起こすことで新たなものが創造されることである (Tarde [1898] 1999)。この反復 - 対立 - 適合は、ヘーゲルの弁証法およびダーウィンの進化論からの影響と不満に由来し⁷、それらを独自に推し進める「差異と反復の弁証法」(Deleuze [1969] 2007: 456) として、タルドの議論の基本的な枠組みとなっている。この枠組みは、分析対象がそのはじめから多数のさまざまな差異をもつ要素から構成されており、常に変化し続けているという前提を引き受け、要素の多数多様性とその動的変化を分析するために用いられている。間精神的な作用も、この枠組みのなかで論じられている。間精神的な作用 (1898年においては社会的な現象とされている) の分

キーワード：ガブリエル・タルド、経済心理学、労働、発明、退屈

* 立命館大学大学院先端総合学術研究科 2003年度入学 生命領域

析においては、物理的な現象あるいは反復は「模倣」として、対立は模倣された信念と欲望同士の「闘争」として、適合は新たなものの「発明」として現れるとされる (Tarde [1898] 1999)。

『経済心理学』も同様に、経済現象を反復—対立—適合の三様態から分析する三部構成となっている。第一部の「経済における反復」は、経済現象における信念と欲望の役割の分析を行う章、信念と欲望の混合物としての「欲求」の分析の章、本論の主な分析対象である「労働」の章、普遍的な交換可能性としての「貨幣」の章、発明＝資本説が語られる「資本」の章からなる。第二部の「経済における対立」は、需要－供給曲線を価格決定メカニズムとは認めず、客観的な考察だけでは価格決定ができないと主張する「価格」の章、そして、国内外の同じ商品の生産者同士、消費者同士の闘争、そして異なる商品の生産者における「闘争」を論じた章、共同生産者における危機としてのストライキや暴落の危機が論じられる「危機」の章、そして対立している二項を時間的にずらすことで「動的な均衡」へと変えるものとされる「リズム」の章からなる。「リズム」の章では、経済の周期性について議論されている。第三部の「経済における適合」では、主として発明について論じられる「経済的想像力」の章、その発明と経済的变化などを述べた「経済的想像力の発展」の章、知的な財の所有権についても論じた「所有権」、家計、都市、国家間における交換などを論じた「交換」の章、コラボレーションや分業の発展について、あるいは市場の拡大にともなって広告業の重要性が増大することなどについて論じている「アソシアション」の章があり、そして最後に経済心理学と生物学とのかかわりや、地球規模で行われる経済活動と人口の増大のかかわりなどについて論じた「人口」が論じられている。

この『経済心理学』は、シュンペーター以前に、経済現象における「発明」の重要性を明確に主張している点、そして、精神間の作用に注目するがために、非物質的な財である知識の所有権の問題についても深く論じている点において先駆的である⁸。そして『経済心理学』は、おそらく現在までの「経済心理学」に関する試みにおいても最も体系的な研究であり (Duncan 2002)、その射程は長く新たな集団性の可能性を示唆している点においても⁹、探求されるべき可能性を秘めている。

本論の主題である労働概念についても、タルドは一貫して自らの問いとしての労働問題に答えようとしていた¹⁰。それは、労働問題において間精神作用を見いだすことにある。現代においては、労働実態が非常に多様化するなかで、間精神的な作用を行使する職種が増大し重要となっていること、かつ、管理職にとどまらず、多くの職務において自ら問題発見し能動的に行動しなければならないとされる (Zarifian 2003)。この点において、本論は、タルドが間心理学的な観点から行った労働概念の組み換えを検討することで、その現代性と重要性を提示しようとするものである。

1. 労働の定義

1-1. 目的と手段、障害を含んだ行為としての労働

タルドが最も集中的に労働概念について論じたのは、『経済心理学』第一部5章の「労働」の章であった。ここでタルドは、「あらゆる労働は、先ず、目的 un but、手段 des moyens、障害 des obstacles を含んでいる」(PE I: 222) と定義する。だが、多くの行為はこの条件を満たすため、さらに労働の目的を「労働する者自身のものであるにせよ他者のものであるにせよ、ある欲望を……満足させるような富の生産」(PE I: 222) であり、また労働の障害は、ゲームのように乗り越えるために自ら設定したものではなく、「労働する者の好みに反しており」、同様にその目的も、「他者の命令や欲望、あるいは自らの命令や欲望によって強制されたもの」(PE I: 222) であると限定する¹¹。

タルドは労働の事例として、工場労働、農業、学生の翻訳作業、公文書の作成などを挙げている。タルドにおいては、通常であれば同一のカテゴリーに入れられる行為があるときは労働であるとされ、あるときは労働ではないとされる。祈りの事例をみてみよう。タルドは「祈りは労働だろうか」と問う。答えはイエスでありノーでもある。ミサで祈ることは、信者にとっても、そして信者の祈りを主導する神父にとっても、決まり文句を暗誦するという「手段」によって、精神的な富を積むという「目的」を、娯楽や肉の誘惑という「障害」に抗して実現させようとしている以上、自らの労働の定義にあてはまると主張する。だがすぐに、野原を歩いているとき、宗教的に高揚して調子はずれに、まったく誰も知らない賛美歌を歌い祈るとき、祈りは労働ではなく、むしろ毎日の労苦から開放さ

れたものとなると付け加えるのである (PE I: 225)。このような労働／非労働の区分は、その行為が既知の手段を用いて障害を乗り越え目的達成を目指すものなのか、未知の手段や目的を発見あるいは発明しようとしているのかという基準によっている。

1-2. 発明と労働

労働が行われるためには、先ずそれが発明によって生み出されていなければならない。「新たな種類の専門的な労働や新たな職業の一つ一つは……発見の結果としてはじまった」(LI: 88=61) ののである。労働は、過去のある時点で誰かによって発見された行為の反復である。その意味で、労働は、発明されたものの「模倣」である。ゆえに、「生産することではなく、再生産することこそが、労働本来の効果である……経済的労働においては、模倣と再生産がすべてである」(PE I: 224)。タルドは、再生産と生産を峻別する。「未知のものへと向かう努力はまったく別物である。新しいものを研究することは、労働することではない」(PE I: 225)¹²。新たなものの研究し発明することは、再生産=労働ではなく「生産」である。それまでの経済学は、生産概念において労働と発明を混同してしまっていたとタルドは批判する。この生産=発明と、再生産=労働との区別は、知識生産を問題にするときには非常に重要なものとなる¹³。発明はあくまでも新しいものの探求であるとされており、コミュニケーション能力や記憶力などを必要とする精神労働とは区別されている。

だが、労働と新たなものの探求である発明を区別するということは、すべての「探求する努力が労働ではない」ということを意味しない。例えば、「石壁をつくっている石工は、瞬間瞬間において、どうやって空間を埋めるか、そしてそれを埋めるのに都合のよい石を探してきて埋めてやるかを自問している」(PE I: 224)。だが、この自問は、未知のもの探求ではなく、むしろ熟知した行為を、その状況においていかに当てはめるかという、「小さな問題発見と解決の連なり」であるとされる。

さらに、労働が再生産や反復を意味するとしても、それが完全に無意識的かつ機械的な反復となるのであれば、そのとき「心理学的意味、社会的意味での労働はなされていない」(PE I: 225) とタルドは述べる。すなわち、労働は無意識的な反復という「自動機械のルーティン」と新たなものの探求としての「天才の発明」の間の「中間的な活動形態」(PE I: 225) なのである。労働と発明は、理念上は明確に区別されているが、実践的には「職人の創意工夫がその作品に独特の風合いを与える」ように、労働と発明は交じり合っている。

この労働と発明の交じり合いは、労働の耐えがたさに関わっている。「すべての労働は多かれ少なかれ苦痛であり、すべての発明は多かれ少なかれ快いものである」(PE I: 229) からである。労働の「苦痛」とは、タルドにおいては疲労 *fatigue* と退屈 *ennui* として二つに区分される。

2. 疲労と退屈

2-1. 労働における二つの苦痛：疲労と退屈

労働の付随現象としての疲労には三種類あるとされる。肉体疲労、神経疲労、知的疲労である。肉体疲労は、筋肉を動かすことに伴う疲労である。また知的疲労とは、「官僚制という巨大な行政機械」において、そして「バカロレアの試験官や受験生」のように、新たなものの発見とは異なる仕方で、注意をむけるというだけではない仕方で「脳の消耗状態」をもたらす疲労である。神経疲労は注意 *attention* の疲労ともされ、工場労働者が事例として挙げられている。機械制の工場での労働が厳しいものとなっているのは、この神経疲労のためである。「機械によって節約された筋肉労働よりもはるかに危険な神経疲労を生み出す。雇用主の要求にしたがって注意を長時間固定したままにすることは、脳の自然な傾向とは正反対である」(PE I: 230) からである。これは、「新たな、そしてより巧みな拷問であり、かつてのあらゆる野蛮な地獄においても知られていなかったものであり、機械制工業が現代世界のなかに導き入れたもの」であって、「精神病の増大、自殺の増大、アルコールリズムの増大は、一部にはここから派生している」(PE I: 231)。タルドにとって、工場労働の問題はより疲労度を抑えるために精神物理学的な知見や実験を利用し、身体動作を科学的に観察し分析し、以前よりも疲労度が少なく効率的な動作を発見したとしても、労働者に対して規律によってより注意を払うことを強制的かつ持続的に反復させるなら、問題はまったく解決しないと

ということになるだろう。さらに後に述べるように、「この疲労という現象は、個人心理だけに関わっているのではなく、集合心理にも属している」(PE I: 232) ののである。

疲労と並び労働における苦痛のもう一つの部分をなす退屈さについては、これまで経済学者や社会主義者によってはまったく取り扱われておらず、それは「重要な欠落であった」とタルドは指摘する (PE I: 230)。「機械制工業によって労働者の心理の中で起こされた革命は……労働の退屈さを増大させたか減少させたか？」(PE I: 231-232) という問いは、肉体疲労の減少および神経疲労の増大という問題とは異なった重要な問題であるとされる。なぜなら、人は、退屈であればあるほどより速く疲労するものであり、疲労しても退屈しなければその労働を耐えることができる。だが、「退屈しかつ疲労した状態が続く労働」は、もはや「耐え難い」ものになるとされるからである¹⁴。

ところで、タルドにおいても労働が退屈ではないものとして感受されることもある。労働が「リズム」である感受される場合である¹⁵。労働が詩や音楽、あるいは踊りと同じ起源を有していたというヴントの説を引きながら、この労働におけるリズムについて論じている (PE I: 238-239)。反復は退屈なものだが、それが歌や踊りであるかのような「適合、調和、一致」のリズムを取り戻すとき、それ自体が楽しいものとして、退屈を紛らわせるものとして現れてくる。タルドによるなら、「労働者が歌いながら働いているか」どうかは、労働者が陽気に仕事をできているかの「しるし」なのである¹⁶。

また、「あらゆる労働が自然と他者との共同作業である以上」、「労働の楽しみや興味の程度は、大部分、その労働にかかわる協力者の性質によるものである」(PE I: 240) とされる。というのも彼の故郷では、岩を運ぶというきつい労働に隣人たちがすすんで手助けし、たっぷりとした休憩とともに行われるこの労働は仲間との社交性を満たすもので、疲労するのだが非常に楽しいものであった、と述べている (PE I: 239)¹⁷。

2-2. 誰もやりたくない仕事

タルドにおいては、新しい発見や発明がほとんどなく、同じことを長時間繰り返させられる退屈で疲労する仕事は「耐え難い」ものであるとされるということを確認した。だが「われわれの文明化された生活を維持するため」に必要な不可欠だが退屈で危険な仕事があり、「われわれはそれらの仕事の一切が、規則的に行われてほしいと思っている」(PE I: 236)。そして「もし、誰一人としてそれらの不愉快かつ危険な労働をやりたくないのだとしたら、パリアたち、つまり黒人、アラブの貧農、アジアの黄色人種たちをこれらのきつい仕事に強制するために暴力を用いなければならなくなるだろう。問題は、結局のところ、これらの労働がなされるためには、常に暴力が必要なかどうかを知ることである」(PE I: 236)。

このようなタルドの議論を言い換えるなら、次のようになる。現在においても退屈で危険ではあるが必要な労働は依然として残っており、その配分が問題である。そしてここでの問題は、「誰一人それをやりたくない場合」である。いかなる人間も「パリア」(被差別民)として遇されてはならないことになっているとしても、タルドが指摘しているように、労働の配分に「常に暴力が必要なかどうか」を問う必要がある。言い換えるなら、「暴力」がいかなる形をとることによって、誰に、どのようにして「誰もやりたくない仕事」が割り振られているのかを問う必要がある¹⁸。このタルドの問いから、誰かが担うべき、そして誰もやりたくない仕事があり、そのやりたくない仕事に分業というかたちで誰かに仕事を担わされることは、いかなるやり方において行われる場合に正当なこととなりうるのかという問いを喚起することになるだろう。このような問いを立てるとき、タルドの枠組みに従うなら、仕事の対価として賃金だけを考慮に入れるだけでは不十分である。その仕事に対する敬意や軽蔑といった他者による評価、その労働時間や余暇などが問題の射程に入ってくることになる。

3. 様々な労働の間の敬意の不平等

3-1. 職業に対する敬意

タルドによれば、さまざまな労働において、「問心理学」に属する問題として、「さまざまな労働の間での敬意 *considération* と軽蔑 *déconsidération*」をみていく必要がある (PE I: 243) という。先ほども述べたとおり、労働の「やりたくなさ」にかかわる問いでもある。タルドにおいては、その仕事に払われる敬意によって、退屈さや疲

労を伴う仕事でも「耐え難い」ものではなくともありうるとされるからである。「ある職業がより敬意を払われるようになるとき、その職業の疲労や退屈さは、より少なく感じられるだろうと容易に仮定できる、ということである。いくつかの労働——例えば、行政や政府の労働——は、それが一定の尊敬の対象でなかったなら、あまりにうんざりして疲労してしまうために、それに耐えることができないだろう」(PE I: 250) とされる。

ある労働に対して払われる敬意や軽蔑は、時代や国によって異なっており、非常に多くの事柄が関わっている。どうしてこのように評価が分かれるのか、その条件を考察することが問題とされる。タルドは、同様の職業に対する異なる評価を比較することによって、労働を評価する際の原因を考察しようとする。ギリシャでは工業が軽蔑の対象から尊敬の対象となったこと、農業はその逆に尊敬から軽蔑へと移行したことを論じている。労働に対する評価は、その効用や必要性と対応していない。むしろ、たとえば間精神的な作用を用いる職業、すなわち「人に命令する職業」、「人に教える職業」、「人を感動させる職業」がもっとも敬意を払われると指摘されている。そして、間精神作用をほとんど行使しない職業でも、ギルドを形成し、仲間内で評価しあうことによって、その職業に払われる敬意の向上をはかることもできるとされる。また、発明によってある職業への敬意が向上することもあるとされる。

また、職業に対する敬意の問題として、他人への奉仕と奴隷の問題が取り扱われている。タルドにおいてはホメロスの詩句から事例を引用しながらこのことを論じている。自分のために、あるいは家族のために働くことは、まったく「汚辱的な」ことではなかった。なぜなら、神々さえも自ら大工仕事や家事を行っていると言われているからである。そして、公のために働くこと、つまり無数の人びとのために働くことも、汚辱的ではないとされていた。問題は、「この二つの極限状態の間、知ってはいるが家族ではない個人や小集団のために働くという事実」であった。この事実に対し、「非常に強固な人間の先入観が……奴隷的な特性を結び付けてしまう」(PE I: 247) とされるのである¹⁹。

4. 労働の分類

タルドは、原材料によって職業を分類することを批判しつつ、自らの労働の定義にしたがって目的（満たされるべき欲求）、手段、そして障害に応じて分類を試みている。このとき、欲求としては社会的な欲求と生物的な欲求が挙げられている。その欲求を実現するための手段として肉体的な力によるのか、神経的な力によるのかによってさらに分類される。障害による分類においては、牧畜や農耕、そして医療などにおいては、生命の力に働きかけるために、生命のもつ老化や死という特性が障害となり、工業および輸送業においては、原材料のもつ質量や体積などの特性が障害となるとされる。間精神作用を用いる労働においては、障害は、何よりも先ずその労働の「あて先となる人々、影響を与えようとしている人々」の無関心 *inattention* の結果としてもたらされる。

次に、この目的、手段、障害という自らの労働の定義に即した分類方法だけではなく、その職業の利用のされ方による分類を提案する際、サービスが直接的に利用されるサービス労働と、サービスが間接的に利用される、つまり、生産物の実現・具体化にサービスが利用される生産労働とに分類できるとした (PE I: 261)。さらに、常に一定の仕事があり、賃金も一定となりやすい日常的な労働 *travail courant* と、仕事が一応にあるわけではなく、賃金も日給や時間給であるような非日常的な労働 *travail non courant* に分類している。

このような分類は、カテゴリーとして明確に立てられておらず、互いに錯綜しあうという意味で不完全なものではあるが、タルドはそのことを十分に理解しており、むしろ「不完全な労働の分類は、労働の驚くべき多様性と、労働の正当な報酬をどうするかという問題を解くことの難しさを示すには十分である」(PE I: 262) と述べている。ここでの課題は、「正義への欲求を満足させるために」、この「非常に多様な労働における共通の尺度を見いだすこと」である。だがこのとき、「労働時間や労働の強度は、探求されてきた労働の共通の尺度として満足できるものではない」(PE I: 262)。「つまらなさ、退屈さの度合いも、考察の対象に入るべきではないのだろうか？ 確かにそのとおり。敬意と名誉の度合いも同様である」(PE I: 262)。このようにして、タルドは、労働「時間」や「強度」といった、客観的なものではなく、「つまらなさ」、「退屈さ」、「敬意」、「名誉」といった精神的な作用を、多様な労働の共通の尺度としたのである。

結びにかえて

これまで不十分ながら、『経済心理学』におけるタルドの労働概念についてみてきた。最後にその応用可能性について、示唆しておこう。タルドにおいては、労働は発明と対比され、基本的に苦痛であること、その苦痛の二つの様態として、疲労と退屈があることを指摘した。退屈さが労働を耐え難い苦痛へと変えるという指摘は、現在でも重要性を保っている。さらに、分業にかかわって、「誰もやりたくない仕事」がいかなるやり方で配分されているのか、より具体的な事例において考察する必要があるだろう。タルドにおいてはさらにさまざまな労働に対する敬意の格差について、そして、新たな労働の分類の提起を行っていることを確認した。敬意や軽蔑といった精神的な作用が、いかに反復されていくのか、新たな評価がいかに発明されていくのかといった仕方でもタルドは間心理学的な考察を行っている。現在の企業の役割が「研究や開発、マーケティング、コンセプト立案、コミュニケーションに関連する、あらゆるサービス」(Lazzarato 2004: 95) によって、「記憶」や「注意」に働きかけることにあるとすれば、タルドによる間心理学的考察は、いまや重要性をさらに増しているといえるのではないだろうか。

注

- 1 タルドは、他にも、自らの立場を「間・脳心理学 *psychologie inter-cérébrale*」とも呼んでいる (Tarde [1898] 1999=1943: 55=28)。これらはいずれも、個人の心理を考察対象とする心理学とは異なるものとして提示されている。また間・心理学と社会学は、タルドにおいては密接な関係にある。自らの主張を社会学と呼んでいた頃から、社会学の研究対象である模倣を「ある精神から他の精神への遠隔作用」(LI: 46=12) と定義しているほか、社会関係の純粋な形態を「催眠」と形容するなど、タルドの主張はすでに精神間の作用を重視するものであった。1898年の論文「社会学」においても、社会学と間心理学は「集合心理学、すなわち間・脳心理学、社会学」として並列に並べられていた (Tarde [1898] 2005: 47)。だが、1901年の論文「社会的實在」においては、間・精神作用が社会的な関係だけでなく「反・社会的な関係」を含んでいること、間・心理学は間・精神作用のみを考察対象とするが、社会には精神的な作用だけでなく物理的な関係も含んでいること、社会学が「総合的」な方法論を採用するのにに対し、間心理学は「分析的」な方法論を採ることという三点を挙げて、自らの立場を社会学とは異なるものであると主張している (Tarde 1901b: 457-458)。間心理学と呼ぶことで、間精神作用への注目をより明らかなものとしたのである。『経済心理学』においても、社会学ではなく間心理学を一般理論として位置づけている。
- 2 とりわけ重要なものとしては、タルドの思索の基本的な枠組みを提示している『哲学評論』において1880年に掲載された論文「信念と欲望」(Tarde 1880) や、その翌年の「政治経済学における心理学」(Tarde 1881) が重要である。そして本論で取り上げた発明と労働の関係については「自然ダーウィニズムと社会ダーウィニズム」(Tarde 1884) においてすでに一部展開されている。
- 3 『経済心理学』の全体像については、米田 (1920) およびウィリアムズ (Williams 1982=1996) を参照のこと。
- 4 タルドは一般理論としての「社会学」あるいは「間心理学」を応用するという形で議論を進めることが多い。さらにその背後には、「ネオ・モナドロジー」とタルド自らが呼ぶ独自の枠組みがある。
- 5 価値を主観的なものとみなす点において、タルドと新古典派経済学は親近性を有していると論じられることがある。例えば米田庄太郎は、タルドとメンガーら「新派」経済学との類似性を指摘している (米田 1920: 9)。またレオン・ワルラスとは、書簡のやりとりがあった。タルドは、シャルル・ジッドによって挙げられているバケツの水の事例をもちいて、限界効用論と近い「最終的な効用 *utilité finale*」の問題を取り上げている。タルドの評価は、この「最終的な効用」と価格はたしかに対応しようとしても、「最終的な効用」が価格の原因になっているわけではないとして批判的である。その批判の要点は以下のとおりである。個人内で欲求が変化し、効用が変化することから導き出されており、「ただ一つの欲求にのみ答えるような、機械や非常に特殊な道具のような商品」を想定したばあい、その価格は個人の最終的な効用ではなく、公衆においてその機械や道具をほしいと感じる欲求がどれくらい普及しているかに依存する。そのため、間心理学によってこの公衆に普及する欲求をこそ分析しなければならない (PE II: 24-25)。またタイマンズ (Taymans 1950) は、タルドとシュンペーターについて、その類似性を論じている。タイマンズによれば、両者がともに動的な変化を記述する理論構成となっているだけではなく、タルドの「発明」概念とシュンペーターの「革新」概念がともに「新しく、小さく、偶然的な力」であり、「社会変化」を引き起こすものであるという意味で一致しているなど、タルドとシュンペーターには用語法以上の類似性があることを示している。ただしシュンペーター自身は、タルドについて、「経済学はまさに心理学に基礎を置く」とする主張をもっとも鮮明に述べた人物と評価すると同時に、そのような主張がもはや過去のものであり、「経済学と心理学の間には、認識論的にも実質的にも、われわれの成果に到達するために心理学の助けを借りねばならないような類いの関連はまったく存在しない」(Schumpeter 1908=1984: 371-375) として、心理学に基づく経済学という考え方そのものに対して否定的な評価を下している。
- 6 このように他者からの働きかけによって、ある対象についての価値の重み付けが異なってくるという議論は多く存在しているが、とり

わけ、ルネ・ジラルールの「欲望の三角形」を用いた議論を参照のこと（Girard 1961=1971）。ただしタルドの場合、欲望だけではなく、認識や知識などを含む広い意味での「信念」も価値を決定するものとされており、このことはタルドの議論の特徴をなしている。

- 7 ヘーゲルとダーウィンが併置されているのは奇妙だと思われるかもしれない。タルドにおける反復-対立-適合という枠組みは、物理的なもの、生物学的なものおよび社会的なものすべてに当てはまるものとされており、普遍的なものとしてされている。またヘーゲルの弁証法に対する批判については、例えば『普遍的対立』（Tarde [1897] 1999）の序文を参照。ダーウィンへの批判は、例えば『社会法則』（Tarde [1898] 1999=1943）などを参照。
- 8 タルドの財としての知識の所有権については、詳しくは、ラッツァラートの『発明の力能』（Lazzarato 2002）の第7章および中倉（2007）を参照のこと。
- 9 マウリツィオ・ラッツァラートの「脳の協同」の議論（Lazzarato 2002a）および小泉義之（2007）を参照のこと。
- 10 タルドは、1895年（労働総同盟が結成された年でもある）に刊行された『模倣の法則』の第二版の序文において、連日のように「労働問題」が取り上げられていることを指摘した直後、一般的な議論としてもとれるような仕方ではあるが、次のように述べている。

くりかえしになるが、毎日のように新聞が提起している何らかの観念について、大衆は「これに賛成する」側と「これに反対する」側という二つの陣営に分けられる。しかし両陣営とも、そのとき提起され、押しつけられたこの問題以外のことには関心をもたないのである。ただ少数の野生の精神をもった者や変わり者だけが潜水器をかぶって騒々しい社会という大海の底に潜り、まったく現実味のない奇妙な問題についてあれやこれやと思いをめぐらしている。そしてこの人々こそは明日の発明者なのである（LI: 50=17-18）。

タルドは、労働問題についても、「押しつけられた問題」への賛否ではなく、「まったく現実味のない奇妙な問題」であるような問いを自らたて、答えようとしているとはいえないだろうか。

また1830年代以降、労働問題と関連しつつも異なるかたちで「社会問題」が注目されていく。それは、労働問題というだけでなく、貧困問題や「危険な階級」への対策といった、新たな統治領域としての「社会」が発見されていった過程であるとされる（田中 2003: 100; Donzelot 1994: 17-）。デュルケムが『社会分業論』を提出し、タルドがその『分業論』を含む書評「社会問題」を『哲学評論』誌上に掲載した1893年、その8月の総選挙では、「社会問題」が選挙の争点としてはじめて取り上げられることとなる（中木 1975: 289）。しかしここで注目すべきは、タルドの「社会問題」の議論は、たとえばライシテの問題ともとれる「新しい社会がそれじたいをモデルにして道徳や名誉にかかわる事柄を正しく再構築するのか、それとも古い道徳のほうが社会を再構築するだけの力と権利をもつことになるのか?」といった問いは、「社会問題ではない」のであって、「これらの問題はいずれ解決されるに決まっている」と一蹴している。そのあとで、タルドは「社会問題」を、類似と差異の問題を対象としており、前述の枠組みでは理解することができないとらえている。たとえば次のように述べている。「しかしそれとはまったく別に、根絶することが困難であるのは次のような問題であり、それこそは真の社会問題を構成しているのだ——少数の分離派を多少なりとも強制的に排除したり改宗させることによって、いつか人間精神の完全な一致が成し遂げられることは悪いことなのだろうか? だいたい、そのような日は到来するだろうか? また諸個人の商業的・職業的・野心的な競争、そして諸国民の政治的・軍事的競争が、これまでは夢物語であった労働組織あるいは国家的社会主義によって抑圧されてしまい、そこから世界的な巨大連邦や新たなヨーロッパの均衡が生まれ、ヨーロッパ連合に向けて第一歩が踏み出されるとしたら、それは悪いことなのだろうか? それは未来に実現されるのだろうか? あらゆる支配と抵抗から解放された、絶対的な主権をそなえた強力で自由な社会的権力が生まれ、想像できるかぎりもっとも博愛的で知性的な一党派や一国民によって、その権力が独裁的あるいは因習的な至上権になるのは、はたしてよいことなのか? そして、われわれはこのような見通しに期待してもよいのだろうか?」（LI: 92-93=67）

- 11 ここでの「富」は、物質的な財にかぎられない。ワクチンによって得られる「安全」や、書物を読んだ結果としての「情報」や「真理」でもある。「富は欲望だけではなく、信でもある。実際、品物やサービスの功利性、それを具現化する富は、あるときは信頼 *confiance*、安全 *sécurité*（たとえばそれば、抵当の登記の結果やワクチン接種の結果）、あるいは情報 *information*、真理 *vérité*（書物の結果、あるいは講演の結果）をもたらすことからなり、またあるときは、欲望に応答することからなる」（LGS :471-2）。
- 12 タルドにおける発明は、財を生み出すために必要不可欠であるという理由から、本質的な資本とされている。詳しくはPE Iの七章「資本」、あるいは中倉（2007）を参照のこと。また、発明は本質的に精神的なものであるが、精神的なものがすべて発明的であるわけではないということに注意しておく必要がある。たとえば、小学生が授業で学ぶこと、公証人が書式集にあわせて書類を作成すること、銀行の会計係が帳簿を管理することなどは、まったく発明的ではなく、精神労働であるとされる（PE I: 229）。
- 13 この生産と再生産の峻別の重要性を容易に理解させてくれる問いとして、「どうやってピンやボタンがつくられるかを知ると同じくらい興味深いこと」として、「本はどうやってつくられるのか?」（PE I: 91）という問いをタルドは発している。
- 14 テイラー主義に対する労働者の非常な反発を想起せよ。また実際には、単純労働とみなされている労働でも、そこで働く人々は問題を見ずから発明し、解決しようとするによってその退屈さを紛らそうとする。この指摘を根拠づける事例は無数にある。例えば大野威は、自動車工場に参与観察を行い、ベルト・コンベアのライン上で、労働者たちが工夫してコンベアを上流へと遡ること（この行為は「ぼう」と呼ばれていると大野は教える）を日常的に行っていたと指摘している。「なぜラインをぼうかといえば、そうすることにより幾

- ばくかの余裕を手にすることができ、またラインを一生懸命ぼっている間は一時的にしろ作業の退屈さを忘れることができたからである。何十分もラインをぼった末に得られる時間はせいぜい1-2分あるいは数十秒とわずかなものであったが、それでも長時間にわたり単純・反復作業を強いられている者にとって、それが持つ意味は決して小さなものではなかった」(大野 1997: 148)。
- 15 タルドにおける「リズム」は、『普遍的対立』においては動的な均衡を示す重要な概念とされていた。『普遍的対立』において次のように述べている。「私は別の箇所で、労働とは本質的に模倣、すなわち社会的な反復であると指摘したが、同様に、労働とはリズムであり、周期的な対立であるというのも真実である」(OU: 115)。このように労働は、『普遍的』対立では周期的な対立とされているが、『経済心理学』においては適合や調和であるとされる。「心臓の鼓動、呼吸器の動き、その他のリンパ腺の機能的な作用と同様に、工場内で働くある労働者の行為は、規則的で周期的な反復である。だがこの周期性は、なんらの対立も含んでいない。そこには断続的な再開はあるが、すでに生産されたものの転倒や破壊は決してないからである。この周期性は、適合、調和、一致を含んでいる」(PE II: 191)とされる。
- 16 市田良彦(2007)は、黒人奴隷が労働中に歌うことを許されていたのは、教育コスト及び監視コストをかけることなく、黒人たちの反抗を予防し労働に従事させるためであったという側面を指摘している。
- 17 宮本常一も、類似の議論を展開している(宮本 1984)。宮本は、田植えという激しい肉体労働にもかかわらず、会話や歌などによって労苦ではなく楽しみとして考えられていた時代があったが、効率化され、会話や歌がなくなることによって、労苦として感じられるようになったことを示唆している。
- 18 堀田(2006)は、誰も就きたくない仕事とその配分の問題を考える上で示唆的である。ケアワークを事例として取り上げることで、労働に対する対価の問題だけではなく、実際に身体を動かす労働についても配分が必要であることを、その労働の一律強制までを視野に入れて論じている。ただし、タルドの見解に基づくなら、労働の苦痛を身体的なものに限定することは困難であろう。
- 19 さらにタルドは、分業は奴隷が力を蓄え自由を獲得したのちに、自らも奴隷を持ちたいとする欲望によって生じたと論じている(LI: 486-488)。

参考文献

- Barry, Andrew & Thrift, Nigel 2007 “Gabriel Tarde: imitation, invention, and economy,” *Economy and Society* 36 (4) : 509-525.
- Corbin, Alain 1990 *Le village des cannibales*, Paris: Aubier. (=1997 石井洋二郎・石井啓子訳 『人喰いの村』, 藤原書店).
- Deleuze, Gilles 1968 *Différence et répétition*, Paris: P.U.F. (=2007 財津理訳 『差異と反復』, 河出書房新社).
- Donzelot, Jacques, 1994 *L'invention du social: Essai sur le déclin des passions politiques*, Paris: Seuil.
- Duncan, David 2002 “Gabriel Tarde: the first economic Psychologist? A review of *Psychologie Economique* by Gabriel Tarde,” *Journal of Economic Psychology* 23: 149-156.
- Girard, René 1961 *Mensonge romantique et vérité romanesque*, Paris: Bernard Grasset. (=1971 古田幸男訳 『欲望の現象学——ロマンティックの虚像とロマネスクの真実』, 法政大学出版局).
- 廣澤孝之 2005 『フランス「福祉国家」体制の形成』, 法律文化社.
- 堀田義太郎 2006 「ハードワークと分業——労働と負担の配分をめぐるノート」『PACE』 2: 35-46.
- 市田良彦 2007 『ランシエール——新〈音楽の哲学〉』, 白水社.
- 北垣徹 1993 「「連帯」の理論の創出——デュルケムを中心として」『ソシオロジ』 37 (3) : 59-76.
- _____ 1995 「新たな社会契約——フランス第三共和制期における福祉国家の哲学的基礎」『ソシオロジ』 40 (1) : 69-87.
- 熊沢誠 2007 『格差社会ニッポンで働くということ——雇用と労働のゆくえをみつめて』, 岩波書店.
- Milet, Jean 1970 *Gabriel Tarde et la philosophie de l'histoire*, Paris: Vrin.
- 宮本常一 1984 『忘れられた日本人』, 岩波書店.
- Lazzarato, Maurizio 2001 “La psychologie économique contre l'économie politique,” *Multitudes* 7: 193-202.
- _____ 2002a *Puissance de l'invention: La psychologie économique de Gabriel Tarde contre l'économie politique*, Paris: Les empêcheurs de penser en rond.
- _____ 2002b “Garantir le revenu: une politique pour les multitudes,” *Multitudes* 8. (=2007 中倉智徳訳 「所得を保証すること——マルチチュードのための政治」『VOL』 2: 20-26).
- _____ 2004 *Les révolutions du capitalisme*, Paris: Les empêcheurs de penser en rond. (= 村澤真保呂・中倉智徳訳 『出来事のポリテイクス』, 洛北出版, 近刊予定).
- Lubek, Ian 1981 “Histoire de psychologies sociales perdues : le cas de Gabriel Tarde,” *Revue française de sociologie* 22 (3) : 361-395.
- 中木康夫 1975 『フランス政治史上』, 未来社.
- 中倉智徳 2007 「発明の力能——ポストフォーティズムにおけるガブリエル・タルド」『現代思想』 35 (8) : 125-137.
- 大野威 1997 「X自動車における職場の自律性と自律性管理のメカニズム——X自動車における参与観察の結果から」『社会学評論』 48 (2) :

143-157.

折原浩 2005 『ヴェーバー学の未来——「倫理」論文の読解から歴史・社会科学の方法会得へ』, 未来社.

Roche-Agussol 1926 *Tarde et l'économie psychologique*, Paris: Marcel Rivière.

Salmon, Luise 2005 “Gabriel Tarde et la société parisienne à la fin du XIX^e siècle,” *Revue d'histoire des sciences humaines* 15: 127-140.

佐藤和夫 2005 『仕事のくだらなさとの戦い』, 大月書店.

Schmollar, Gustav 1890 “La division du travail étudiée au point de vue historique,” *Revue d'économie politique* 4: 221-251.

Shumpeter, Joseph 1908 *Das Wesen und der Hauptinhalt der theoretischen Nationalökonomie* (=1984 大野忠男・木村健康・安井琢磨訳 『理論経済学の本質と主要内容』, 岩波書店).

高村学人 2007 『アソシアシオンへの自由——〈共和国〉の論理』, 勁草書房.

田中拓道 2003 「「連帯」の思想史のために——19世紀フランスにおける慈善・友愛・連帯、あるいは社会学の起源」『政治思想研究』 3: 97-114.

_____ 2006 『貧困と共和国——社会的連帯の誕生』, 人文書院.

Tarde, Gabriel 1880 “La croyance et le désir: La possibilité de leur mesure,” *Revue philosophique* 10: 150-180, 264-283.

_____ 1881 “La psychologie en économie politique,” *Revue philosophique* 12: 232-250, 401-418.

_____ 1884a “Darwinisme naturel et darwinisme social,” *Revue philosophique* 17: 607-637.

_____ 1884b “Revue générale: Études sur le socialisme contemporain,” *Revue philosophique* 18: 173-192.

_____ 1888 “Les deux sens de la valeur,” *Revue d'économie politique* 2: 526-540, 561-576.

_____ 1893 “Revue général: Questions sociales,” *Revue philosophique* 35: 618-638.

_____ 1895 *Essais et mélanges sociologiques*, Lyon: Storck/Paris: Maloine.

_____ [1895] 1999 *La Logique sociale*, Paris: Institut Synthélabo. =LGSと略記。

_____ [1895] 2001 *Les lois de l'imitation: Étude sociologique*, Paris: Les empêcheurs de penser en rond. (=2007 池田祥英・村澤真保呂訳 『模倣の法則』, 河出書房新社). =LIと略記。

_____ [1897] 1999 *L'Opposition universelle: Essai d'une théorie des contraires*, Paris: Institut Synthélabo.

_____ [1898] 1999 *Les lois sociales*, Paris: Institut Synthélabo. (=1943 小林珍雄訳 『社会法則』, 創元社).

_____ [1898] 2005 “La sociologie,” in Gabriel Tarde, *Études de psychologie sociale*, Adamant Media Corporation. [reprint]

_____ 1900 “L'esprit de groupe: conférence faite au collège libre des sciences sociales,” *Archives d'anthropologie criminelle*, 15: 3-27.

_____ 1901a *L'opinion et la foule*, Paris: Félix Alcan. (=1964] 1989 稲葉三千男訳 『世論と群集』, 未来社).

_____ 1901b “La réalité sociale,” *Revue philosophique* 52: 457-77.

_____ 1902 *Psychologie économique* tome 1, Paris: Félix Alcan. =PE I と略記。

_____ 1902 *Psychologie économique* tome 2, Paris: Félix Alcan. =PE II と略記。

_____ 1902 “L'invention considérée comme moteur de l'évolution sociale,” *Revue internationale de sociologie* 10: 561-574.

田崎英明 1990 『夢の労働 労働の夢——フランス初期社会主義の経験』, 青弓社.

Taymans, Adrien 1950 “Tarde and Schumpeter: A Similar Vision,” *Quarterly Journal of Economics* 64 (4) : 611-622.

米田庄太郎 1911 「民法ノ社會學的基礎ニ就テ」『京都法學會雜誌』 6 (7) : 1-23.

_____ 1920 『經濟心理の脏究』, 弘文堂書房.

Weber, Max [1908] 1924 “Methodologische Einleitung für die Erhebungen des Vereins für Sozialpolitik über Auslese und Anpassung (Berufswahlen und Berufsschicksal) der Arbeiterschaft der geschlossenen Grossindustrie,” *Gesammelte Aufsätze zur Soziologie und Sozialpolitik* (=1980 鼓肇雄訳 「封鎖的大工業労働者の淘汰と適応（職業選択と職業運命）に関する社会政策学会の調査のための方法的序説」『工業労働調査論』, 日本労働協会).

Williams, Rosalind 1982 *Dream World: Mass Consumption in Late Nineteenth-Century France*, University of California Press (=1996 吉田典子・田村真理訳 『夢の消費革命——パリ万博と大衆消費の興隆』, 工作舎).

Zarifian, Philippe 2003 *À quoi sert le travail ?*, Paris: La Dispute.

The Conception of Labor in Gabriel Tarde's *Psychologie Économique*

NAKAKURA Tomonori

Abstract:

This article examines Gabriel Tarde's conception of labor. In the late 19th century and early 20th century, Tarde aimed to overcome the conflict between classical economics and socialist economics. To overcome this conflict, Tarde introduced subjective factors, such as belief, desire, knowledge and will, as fundamental components in his economic thought, "psychologie économique." In his work of the same name, *Psychologie Économique* (1902), Tarde reconstructed the conception of value, production, capital and labor on subjective factors and their interaction. Also, Tarde was a precursor in the emphasis on the importance of invention in economic phenomenon. In his thought, labor is not production but reproduction of what is made by previous invention. Genuine production, in contrast, is the invention of "what is new." Invention is pleasurable, but labor is painful. The pain of labor is made of two factors, fatigue and boredom. In modernity, labor became less and less fatiguing, but more and more boring. Tarde emphasized the importance of boredom, because the boredom increased fatigue and made labor intolerable. Thus, in conclusion, Gabriel Tarde's conception of labor was based on subjective factors.

Keywords: Gabriel Tarde, Economic Psychology, labor, invention, boredom